

万国の労働者、被抑圧民族団結せよ！

社共にかわる革命的労働者党を創建しよう！

1998年9月1日

《毎月1日発行》  
第205号 4項200円

年間定期購読料（送料込み）  
開封2500円／密封3000円

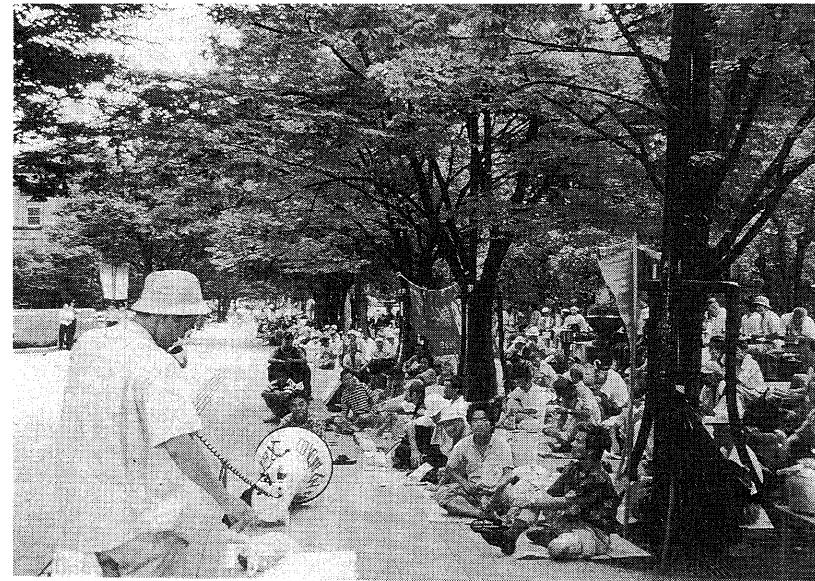
# 赤旗

共産主義者同盟中央機関紙

(1980年2月28日第3種郵便物認可)

発行 埼玉県新座郵便局私書箱47号  
郵便振替：00590-0-20004  
(関西)大阪港郵便局私書箱40号  
郵便振替：00940-1-132778  
E-mail  
<http://www.ga3129@i.bekkoame.or.jp>

# 経済破綻に社会主義政策の対置を



釜日労・反失連、市庁前で野営闘争を展開

八月二十一日、米帝・クリントンはアフガニスタンのイスラム復興運動拠点、およびストーナーの「化学兵器工場」などを決め付けた工場施設に百発ものトマホーク巡航ミサイルを撃ち込み、両国人民を虐殺し施設を破壊した。七日のケニア・タンザニア両大使館爆破戦闘への「報復攻撃」などという名目によるこの襲撃は、アメリカ帝国主義がその軍事超大国としての侵略的性格をますます強めてきていることを余すことなく証明した。一国の主権を完全に無視し、戦争宣言もないままに他國

の人民を虐殺した。しかも、「大統領の不倫疑惑」という国内政治から国民の目をそらすためになされたことを考えれば、クリントンを戦争犯人として国際法廷に引きずり出さなければならぬ。

アメリカの産・軍複合体は、

冷戦体制崩壊以降もその巨大な

軍事機構を維持するために無理矢理「敵をつくりだすこと」に苦労している。米国のみならず者国家「テロ支援国家」として軍事的攻撃的として、暴虐の限りを尽くしている。それゆ

# 米帝によるアフガニスタン・ストーナー攻撃を許すな

## 今号の主な記事

3面 釜ヶ崎反失業闘争「夏の陣」第二波  
4面 書評・旭凡太郎「資本主義世界の現在」

2面 左折

自民党と代わり映えのしない自民黨と連立政権を組んでおらず、民主黨も残すに違いない。また、アラブを始め世界のプロレタリアート・人民は、この米帝・クリントンの凶暴極まりない虐殺をして許はしないであろう。

積みあがつたミサイルを雨のように他国に降り注がせた。「無用の長物」といわれないように

軍艦を稼動させ、在庫として軍艦を稼動させ、トマホークの

## 戦争マニュアル＝新「ガイドライン」関連法案を粉碎しよう

日本のプロレタリアート・人民を総動員態勢に巻き込む法体制と実働訓練を準備している（概要は左図参照、浅井基文氏著「新ガイドラインQ & A」より転載）。

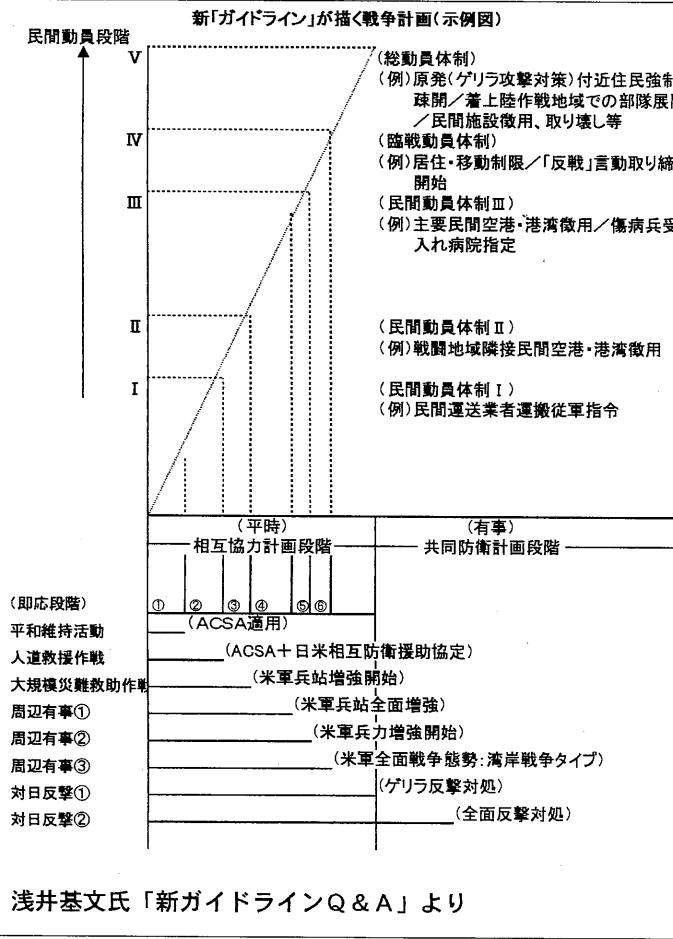
## 日本共産党の社民化への道

日本は、こうした米帝の「イン」の下、米帝の命令下自動的にに戦争に参加する軍事マニュアル関連法案をこの臨時国会で通過させんとしている。朝鮮民主主義人民共和国、中国を具体的な交戦対象国として想定した

エスマントとして「新ガイドライン」は、米帝の命令下自動的にに戦争に参加する軍事マニュアル関連法案をこの臨時国会で通過させんとしている。朝鮮民主主義人民共和国、中国を具体的な交戦対象国として想定した

日本は、こうした米帝の「イン」の下、米帝の命令下自動的にに戦争に参加する軍事マニュアル関連法案をこの臨時国会で通過させんとしている。朝鮮民主主義人民共和国、中国を具体的な交戦対象国として想定した

日本は、こうした米帝の「イン」の下、米帝の命令下自動的にに戦争に参加する軍事マニュアル関連法案をこの臨時国会で通過させんとしている。朝鮮民主主義人民共和国、中国を具体的な交戦対象国として想定した



【2面につづく】

1面から

# 経済回復は社会主義政策の本筋も



各地で寄せ場夏祭り【写真：上は山谷、下は釜ヶ崎】



いまや、自民党から日共に至るまで「景気回復」の大合唱が救国合戦の様相を呈している。自民党的ように対米追随型のそれから日共のように自國帝國主義擁護型のそれに至るまで幅はあるものの、いずれも大して代わり映えのしないものとなつてない。日本をはじめアジア諸国を蔽っている不況の嵐は、資本主義の経済システムの不可避

的な随伴物である循環的な過剰生産の暴力的解決形態としてある企業の淘汰であるとともに、生産能力の発展段階ともはや相容れなくなつた資本主義的生産様式の根本的な矛盾が、経済のグローバリゼーションの中で世界的なレベルで弱い環となつてゐるこれらの国民経済を破綻の淵に沈めている。インドネシアでは、企業の半数以上が破産状態となつていて。

いま、日本をはじめアジア諸国を蔽っている不況の嵐は、資本主義の経済システムの不可避

## 「景気回復」の大合唱に社会主義政策を対置せよ

が、労働者階級・人民に押し被さつくることに対しては、全力を挙げて反撃しなければならない。だが、帝国主義本国に住むわれわれ日本の労働者階級がこの経済危機に対して攻勢的に社会主義革命への一步を手繕り寄せるためには、日共のように

未消化やサービス残業の存在に

対しては雇用主への罰則などで

雇用の増大と労働の軽減を図ること。

(2)二十、三十、四十年と働いてきた中高年労働者の失

業保険の最大給付日数を「一三、

四年とし、転職への準備期間を延ばすこと。(3)国がすべての仕

事を求める労働者に仕事を保障すること。(4)年金支給開始年齢の六十五歳への後退を許さな

%の割増し賃金 年間一ヶ月のバケーション休暇 有給休暇の週三十時間労働制、残業の二百

時間労働をもつて「経済大国

にのし上がつてきた半世紀に渡

る労働政策を根底から覆し、(1)

週三十時間労働制、残業の二百

時間労働をもつて「経済大国



この六月に、旭凡太郎氏が自己的見解を一冊の本にまとめ出版した。この本は、その副題に「マルクス主義の復活宣言」とあるように、マルクス主義を捨て去る時流に抗しマルクス主義を継承する立場から、資本主義世界の現在」を批判しようと試みたものである。われわれは、その構えを高く評価するし、こうしたこと一つの契機に、マルクス主義の現代的発展に向かって、その論戦の渦が広がることを願うものである。

こうした立場から、三つの批判点を提起していきたい。

第一は、多国籍企業論において、資本の運動の現代的な経済的諸特徴をそれなりに正しく指摘しながら、革命の問題に引きつけて踏み込んだ現実の解明になつてゐないことがある。

多国籍企業の運動の政治的条件は、国際反革命体制である。

すなわち、NATO、日米安保、国連、IMF・GATT(WTO)、世銀などである。多国籍企業論は、ここから展開しなければならない。旭氏の論は、この政治的条件が軽視され、かつ、間違つて認識されている。

この体制は、帝国主義の世界市場再分割競争(世界大戦)の中から、その諸結果を通して形成された。ポイントは、米帝による日独への軍事駐留と英仏の旧植民地支配の解体である。一つの巨大な帝国主義が、他の帝国主義をも政治的に自己のくびきに縛り付け、共同して、ブロック化を許さず、資本の多国籍展開に道を開き、ブルジョアの世界秩序の維持に当たる國際体制を創り上げた。

戦後の帝国主義の国際関係は、旭氏のいうとして第二次ブロックの見解でもあつた「侵略反革命同盟」などという單なる「平和的同盟」ではない。もし「平和的同盟」ならそれは一時的なも

のとして終わり、世界大戦が繰り返されたに違いない。

今日の帝国主義国家は、一つの巨大的帝国主義が他の帝国主連のを握ることによって初めで、わが国の戦後の革命運動における反米民族民主革命路線と日帝打倒社会主義革命路線の対立を止揚し、日帝打倒米帝一掃社会主義革命路線を確定することができるのである。

旭氏は、今日のコンピュータ・ネットワークの発達を、

政治的上部構造だという点であ

ばならないのは、この国際反革命体制が、資本のより高度の(未

期的)発展段階の運動を支える。

国際反革命体制は、金融独占資本の多国籍展開に道を開いた。金融独占資本は、世界市場の地域的分割と再分割の時代から、自国・地域の枠を越えて相

互に浸透し文字通り世界市場を独占する時代に入った。多国籍企

業間の競争は、国際独占を導く。

第二は、階級社会の発展の究極の規定要因である生産力労働手段と生産関係の矛盾の領域において、いま世界史的根柢的な変動が進行していることについて、否定的見解に立つていることである。すなわち、「コンピューター・情報化資本主義については既述したごく、一九二〇年代アメリカで始まる耐久消費財を基礎とする産業構造・大量生産・大量消費の基礎となる直接的生産過程すなれば、物的生産のあり方だけでなく労働再生産のあり方を問題にしなければならないし、男女

評書

# 「資本主義世界の現在」

## マルクス主義の復活宣言

深山和彦

官僚ブルジョアジーの形成とその権力篡奪の企てに対して、これを見抜き、継続革命で打ち碎くことができないようでは、人間の自由な発展を目的とする社会の建設はなしえない。

二つは、人間の自由な発展と

以上総じて言えば、マルクス

・レーニン主義を継承してい

が、現代的発展させることに

成功していないといふことで

ある。しかし、この本は、旭氏

の長年にわたる理論的營為の結晶だけあって、共産主義運動の再生に向けた論議の材料として

充份耐え得る骨格と豊富さを持

つてゐる。是非一読を勧めたい。

一つは、世界市場と経済的

的同盟

の役割分業を廃止しなければ

ならない。そして、一人ひとりの

自主管理能力を獲得すること

が肝心なことなのだという言い

方で、それらの廢絶について曖昧な態度をとつてゐることであ

る。旭氏の社会革命論の内容は、

農業牧畜への移行に始まり機械制大工業の出現で頂点に達し

たそうした発展の時代を終焉さ

れた。それは、採取狩猟から

対立を止揚し、日帝打倒米帝

一掃社会主義革命路線を確定

することができるのである。

だが旭氏は、せつかく多国籍

機械制大工業の発達の継続とみ

ており、しかも過去の産業構造

の発達と比較して「新しい産業」

と言える程のものでないと、そ

の意味を一段と軽視している訳

である。

だが事態の本質は次のよう

なものである。

そもそも機械の本質は、道具

と使う人間の筋肉労働を代替す

るという点にある。人間の筋肉

労働を代替する装置に道具を組

み込んだものが機械である。こ

れに対しても、コンピューターの

本質は、人間の精神労働を代替

するという点にある。機械とは本質が異なるのである。

そして、コンピューターの発達

によって、労働手段の発達は、

人間労働を筋肉労働だけでなく

精神労働を含めてトータルに代替

していく成熟段階に入ったので

ある。同時に、コンピューター

・ネットワークの発達が、労働

してくる根拠がある。

旭氏は、ポスト・フオーディズムは無いという。資本主義の今日的安定形態を拒否する心情は良い。しかし、機械制大工業と肉体労働への労働の分割の産物である。だから、人間の自由な発展を目的とする社会を目指すならば、これらのシステムの廃止とその方法について、正面切つて取り上げなければならないのである。

二つは、人間の自由な発展と

精神労働と肉体労働への社会の分裂を打ち固める方向に作用す

る。これは、資本の專制支配を強化するものであった。

だが今われわれは、コンピ

ューター・ネットワークが発達

し、労働手段の発達が精神労働

と肉体労働とをトータルに代替

している。

一つは、世界市場と経済的

的同盟

の役割分業を廃止しなければ

ならない。そして、一人ひとりの

自主管理能力を獲得すること

が肝心なことなのだという言い

方で、それらの廢絶について曖

昧な態度をとつてゐることであ

る。旭氏の社会革命論の内容は、

農業牧畜への移行に始まり機械制大工業の出現で頂点に達し

たそうした発展の時代を終焉さ

れた。それは、採取狩猟から

対立を止揚し、日帝打倒米帝

一掃社会主義革命路線を確定

することができるのである。

だが機械制大工業の時代が終わ

り、資本は形成されつある次

の時代の物質的条件や新たな欲

求との関係を「調整しなければ

ならないくなっているのである。

ここに、構想と実行の分離、労

働の細分化・専門化といふこれ

までの労働編成からの転換を探

れてきた。だが機械制大

工業の発達を打ち碎いて自己を貴

値にしていく。まさにコンピュー

ター・ネットワークの発達は、

これまでの「新しい産業」の勃興

が通用しない、その意味でも時

代を画する事態なのである。

これまで共産主義者は、機械

制大工業の発達をもつて社会主

義革命の物質的条件の成熟であ

る」と考へてきた。だが機械制大

工業の時代が終わ

り、資本は形成されつある次

の時代の物質的条件や新たな欲

求との関係を「調整しなければ

ならないくなっているのである。

ここに、構想と実行の分離、労

働の細分化・専門化といふこれ

までの労働編成からの転換を探

れてきた。だが機械制大

工業の時代が終わ

り、資本は形成されつある次

の時代の物質的条件や新たな欲

求との関係を「調整しなければ

ならないくなっているのである。

ここに、構想と実行の分離、労

働の細分化・専門化といふこれ

までの労働編成からの転換を探

れてきた。だが機械制大

工業の時代が終わ

り、資本は形成されつある次

の時代の物質的条件や新たな欲

求との関係を「調整しなければ

ならないくなっているのである。

ここに、構想と実行の分離、労

働の細分化・専門化といふこれ

までの労働編成からの転換を探

れてきた。だが機械制大

工業の時代が終わ

り、資本は形成されつある次

の時代の物質的条件や新たな欲

求との関係を「調整しなければ

ならないくなっているのである。

ここに、構想と実行の分離、労

働の細分化・専門化といふこれ

までの労働編成からの転換を探

れてきた。だが機械制大

<div data-bbox="392 2375 51